

生活書店及び鄒韜奮研究に関するレビュー

楊 韜

0 はじめに

本稿は、1950年代以降に現れた、生活書店及びその創立者かつ経営者であるジャーナリスト鄒韜奮に関する研究のレビューである。鄒韜奮の経歴及び彼の中国近代史における大きな影響力、そして彼が中心人物として経営に関わった生活書店も近代中国の文化史上に大きな役割を果たした言論出版機構であったことから、生活書店及び鄒韜奮に関する研究は中国語だけでなく、日本語や英語によるものも数多く存在する。これらの研究は、「生活書店研究」、「鄒韜奮研究」と呼ばれるべきものであるが、生活書店の歴史は、ほぼ鄒韜奮の生涯と並行しているため、ここでは両者を厳密に区分することを避け、「生活書店及び鄒韜奮研究」という表現を用いる。すなわち、生活書店研究と鄒韜奮研究の両者は、お互いに含めたものとして捉えるものとする。

以下では、まず生活書店及び鄒韜奮研究に欠かせない一次資料を概説し、次に先行研究（伝記や回顧録を除く）を、それぞれ中国語、日本語、英語によるものの三種類に分け、それらを発表順に考察する。重要な先行研究のいくつかを具体的に挙げて紹介する。なお、韓国語による先行研究に関しても把握したものについて言及する。さらに、これら先行研究の傾向及び特徴を分析し、今後の生活書店及び鄒韜奮研究の解決すべき問題点について検討する。

1 一次資料の概要

これまでの研究では、生活書店が出版した雑誌（とりわけ週刊誌『生活』）のほかに、鄒韜奮の手による文章が一次資料として用いられている。鄒韜奮はジャーナリストとして、当時の様々な雑誌や新聞に大量の評論記事を書いたほか、論文集や訳書も数多く残している。彼が残した記事、論文、翻訳作品は、ほぼすべてが『韜奮文集』と『韜奮全集』に収められている。『韜奮文集』は1955年に北京三聯書店から出版された全3巻の文集であり、1978年に香港三連聯書店によって再版された。『韜奮文集』には鄒韜奮の代表的な論文集である『萍踪寄語』、『抗戦以来』などが収録されている。一方、『韜奮全

集』は1995年に上海人民出版社から出版された14巻の全集である。延べ800万字の『韜奮全集』は、第1-10巻が鄒韜奮の論評記事を年代順に収録したもので、第11-14巻は鄒韜奮の翻訳した学術書と小説によって構成されている。また、このほかに「韜奮年表」、「韜奮編著・翻訳書リスト」、「韜奮のペンネーム一覧表」なども収録されている。『韜奮全集』の出版は、体系的な生活書店／鄒韜奮研究を可能にするものである。また、二次資料として、鄒韜奮や生活書店に関する伝記や回顧録が断続的に出版されている。代表的なものとして、上海韜奮記念館（1958）、穆欣（1958、1981）、鄒嘉驪（1985）、龔潤生（1994）、陳揮（1999、2009）が挙げられる。なかには、穆欣（1981）のように1986年に田島淳によって邦訳され、サイマル出版会から出版されたようなものもある。

2 中国語による先行研究について

まず、中国語による先行研究を概観する。これにはすでに言及した様々な伝記や回顧録のほかに、鄒韜奮の娘である鄒嘉驪が編著した年譜などもある。しかし管見では、長い間に鄒韜奮や生活書店を本格的にアカデミックな研究対象となすものは多くない。上海にある韜奮記念館は2004年以降、『鄒韜奮研究』シリーズを三冊発行しているが、そのなかいくつかの研究論文が掲載されている。このシリーズのなかで、特に価値のあるものは第二輯に収録された三つの文章である。この三つの文章はいずれも鄒韜奮によるものであり、『韜奮全集』に未収録のものである。すなわち、①「紀念戈公振先生」、②「給泰来、曦光的信」、③「致徐伯昕的信」。鄒韜奮によって書かれたもののほとんどが『韜奮全集』に収録されているが、このように新たに発見されたものもある。

中国語による研究における代表的な専著としては、郝丹立（2002）と趙文（2010）が挙げられる。郝丹立（2002）は、これまで中国国内に固定化されてきた「鄒韜奮はブルジョア的民主主義者から共産主義者へと変身した」という構図を打破し、鄒韜奮が追求した民主主義は、プロレタリアートによる専制を否定した欧米式民主主義であると言い切る。さらに、鄒韜奮は偉大な愛国主義者であり、傑出した民主化闘士であるが、生涯を通じて一度もマルクス主義者であったことはない論じている。¹これは、これまでの中国における鄒韜奮の位置づけと大きく異なっている。これについては、第6節「先行研究の傾向と特徴」でも触れる。

趙文（2010）は、生活書店が発行した多くの雑誌のなかで最も名高い週刊誌『生活』を対象とし、そこに見られる上海を代表とする大都市住民の生活文化を考察している。趙文（2010）では、1990年代以降のYeh Wen-HsinやLee Leo Ou-fanによる一連の近代上海都市文化研究の影響を受け、週刊誌『生活』と上海の都市住民の生活文化の形成との

関係が考察されている。趙文（2010）の考察範疇は1931年の満州事変（九・一八事変）までの期間であり、事実上生活書店の創立以前の時期しか扱っていないが、生活書店の設立までの背景が詳しく論じられている。この著作は早期段階の生活書店の代表的な研究といえる。

3 日本語による先行研究について

次に、日本語による先行研究を概観する。管見ではもっとも早期の研究として、横山英（1967）が挙げられる。（鄒韜奮を日本にいち早く紹介したのは、小池洋一（1960）であることを付け加えておく。）横山英（1967）の主な論点は、鄒韜奮の一生がブルジョア改良主義思想から脱却してプロレタリアートの立場に転じた中国知識人の一典型であるということである。大石智良（1968）は鄒韜奮が読者とのコミュニケーションを重視する方法を一二・九運動にフルに活用したと論じている。

その後の石島紀之（1971）は、1930年から1931年にかけて、鄒韜奮はなお反共産主義と改良主義から抜け出していなかったものの、日本の中国東北地域侵略による危機の増大と国民党の腐敗、内戦の深まりに対して深刻な危機を感じ、次第に国民党統制に批判的態度を強めるようになったと分析している。そして、全民族の抗日闘争の高揚のなかで、鄒韜奮は基本的に反共産主義を克服し、戦闘的民主主義者に成長したと結論づけた。これに引き続き、石島紀之（1972）では、抗日民族統一戦線は単に統一した民族的抵抗という意味にとどまらず、抗日を可能とする「社会制度の根本的改革」＝革命の問題を含まざるをえなかったところに、1930年代の中国の厳しい現実があったと論じられている。中国人民にとっては、民族と階級という二つの課題が分かちがたく結びついていく必然性があったと、論点を鄒韜奮個人から当時の中国国民という広い対象へと広げている。

1970年代後半から1980年代初めにかけて、今村与志雄（1979）、斎藤秋男（1981）のように、鄒韜奮の教育背景や魯迅との交際について扱った研究が現れた。2000年以降には、神戸輝夫（2001）、神戸輝夫・田宇新（2003）など、抗日戦争期の生活書店を中心的に扱った研究論文が発表されている。また、高橋俊（2009）のように、生活書店出版物から当時の労働観について考察する研究もある。

4 英語による先行研究について

最後に、英語圏での先行研究について概観する。管見では英語圏における生活書店や鄒韜奮に関する研究は多くないが、以下の四名の研究者によるものが代表的な研究として挙げられる。

Gewurtz Speisman (1975) は主に鄒韜奮がソ連及びアメリカを訪れた時の状況を考察している。Coble Parks はアメリカの中国近代史研究の大家であり、とりわけ日中戦争期に関する著作が多い。Coble Parks (1985、1991) は鄒韜奮と救国会との関係から、蒋介石の不抵抗政策に対する不満を中心に、生活書店の抗日活動について考察している。Yeh Wen-Hsin はアメリカの中国近代史研究者であり、彼女による一連の研究は、近代中国の都市文化研究分野において大きな反響を呼んだ。Yeh Wen-Hsin は近代上海における経済倫理という側面から着手し、企業の経営者や従業員たちがどのように社会的地位を得たのか、またその経営活動にどのような文化的背景があったのかという点に焦点を当てている。Yeh Wen-Hsin (1992、2007) はこのような視座の下で、雑誌『生活』から当時の都市小市民の日常生活や職業観について読み取っている。

Mitter Rana はイギリスの中国近代史研究者であり、とりわけ満州及び抗日戦争に関する研究が多い。Mitter Rana (2000、2004) は、鄒韜奮の盟友であり雑誌『新生』の創刊者である杜重遠について言及しているほかに、生活書店の出版物における投書欄に関する考察も行っている。Mitter Rana (2004) において、彼は Yeh Wen-Hsin と同じように生活書店の出版物の投書欄を用いて論じているが、彼の思考の矛先は経済倫理に向けられたものではない。Mitter Rana は、五四運動と新文化運動という大きな歴史背景を視野とし、鄒韜奮の投書欄における言説から次のように読み解いている。すなわち、鄒韜奮が読者に伝えたいのは、新式の生活をしていても、家父長制の影響から逃れられないという現実である。²

5 韓国語による先行研究について

韓国語による先行研究に関して、筆者が確認できたのは一つのみである。田寅甲(2003) は、『生活週刊』をリソースとして、そこに反映された近代上海の日常生活を考察している。著者は、当時の上海人の日常生活は、単に伝統文化と最先端文化という二種類の文化を一体化した混合的なものではないと主張している。近代上海の日常的ライフスタイルとは、異なる文化及び価値観の変化の最中であって、複数レベルにわたって共存するものであると述べられている。

6 先行研究の傾向と特徴

以上、中国、日本、英語圏における生活書店に関する先行研究を整理した。ここからは、これらの研究に見られる傾向と特徴について分析していきたい。これまでの先行研究では、主に三つの側面に焦点が当てられてきた。

すなわち、第一に、生活書店の創業者・経営者である鄒韜奮の思想変遷に関する検討である。これにはたとえば、横山英（1967）、石島紀之（1971、1972）、郝丹立（2002）などが挙げられる。中国においても日本においても、長期間にわたり鄒韜奮が「ブルジョアジー思想から脱却し、共産主義者へと変身した」という構図が固定化された。1990年代半ば以降、郝丹立の研究が示すように、このような観点に対する異議が唱えられるようになった。郝丹立は『韜奮文集』（1955）と『韜奮全集』（1995）の「序言」を比較しながら、鄒韜奮の位置づけの変化を述べている。郝丹立によると、1955年の『韜奮文集』の「序言」である「韜奮思想の発展」のなかで、鄒韜奮はブルジョアジー思想から脱却した後プロレタリアートの立場に転じた中国知識人の典型と位置付けられている。³そして郝丹立は、1955年当時の鄒韜奮研究の目的は、一部の思想改造が完成していなかった知識人に対して、個人主義を克服しマルクス主義及び共産党に対する尊重と支持に転じた鄒韜奮に習おうという呼びかけであったと述べている。一方、1995年の『韜奮全集』の「序言」である「編集説明」のなかで、鄒韜奮は傑出した愛国者、共産主義者と位置付けられたが、しかし現代における鄒韜奮研究の目的は、「現代中国歴史研究に豊富な材料を提供するものであり、20世紀以来中国の政治、経済、社会生活の各方面に存在した多数の問題を反復的に検討するにあたって、切実かつ意味深い思考である」⁴と、そこには書かれている。この変化について、郝丹立は「鄒韜奮研究を単なる外在的な道具論から、将来性をもつ現代文化研究の領域に置き換えた」⁵と指摘している。

第二に、生活書店の出版物における抗日言説に関する分析である。たとえば斎藤秋男（1981）、Coble Parks（1985、1991）、Mitter Rana（2000）、神戸輝夫（2001）、神戸輝夫・田宇新（2003）などが挙げられる。鄒韜奮の抗日言論が広い範囲にわたって影響を及ぼしたことや、生活書店が近代中国、とりわけ日中戦争期において大きな影響をもたらした出版機構であった故に、多くの抗戦争研究のなかで言及されている。しかし、その多くが断片的な研究であり、生活書店及び鄒韜奮研究というよりは、抗日戦争史研究という分野に属するものであろう。

第三に、生活書店の出版物にみられる都市住民の生活文化に関する考察である。たとえば、Yeh Wen-Hsin（1992、2007）、田寅甲（2003）、Mitter Rana（2004）、高橋俊（2009）、趙文（2010）などが挙げられる。生活書店の出版物、とくに雑誌『生活』は八年間という長い期間にわたって発行され、1933年12月に国民政府当局に発行が禁止された時点

では15万部以上の発行部数を擁していた。そこには、当時の中国社会の現状が生々しく反映されている。このような生活書店の出版物は近代中国都市住民の生活文化研究にとって、豊富なリソースとなっている。また、このような研究は、ほとんど生活書店の出版物そのものではなく、そこから読み取れる当時社会の動き（経済倫理の浸透、労働観念の生成、ナショナリズムの高揚など）に視線を向けられている。

これらの先行研究の一つの共通点は、1930年代における鄒韜奮と生活書店を中心に扱っていることだと言えよう。管見では、1940年代の生活書店について言及したものはほとんどない。その原因として、以下の二つが考えられる。

第一に、鄒韜奮の人生の「転換期」として一般に捉えられるのは、1931年前後である。すなわち、1931年9月18日の「満州事変」の勃発による、日本の中国東北地域侵略が重要な意味を持つのである。この出来事は、当時の中国国民に大きな衝撃を与えた。「満州事変」以降、鄒韜奮は生活書店の出版物において、戦闘的な抗日主張を展開し、また国民政府の不抵抗姿勢及び国内専制政策への批判も強めた。このことを理由に、多くの研究者が1931年を鄒韜奮の思想の転換通過点とみなしているのである。

第二に、鄒韜奮は生活書店関係者のなかで最も中心的な存在であったが、彼は1944年に耳の病がもとでこの世を去っている。ようするに、鄒韜奮は治療を受け始めた1943年前後以降、生活書店の経営に携わってはいたが、実際の経営は生活書店の総経理である徐伯昕に託していた。また、1930年代初期から、1941年前後までに、胡愈之の蔭でのサポートも大きかった。1943年以降の生活書店は、鄒韜奮に代わって複数の人々によって経営され、のちに三聯書店へと改編された。この間の状況は極めて複雑であり、また記録資料も断片的なものが多く、体系的に考察するのは困難であると言えよう。これは、これまでの研究が1930年代を中心になされてきたもう一つの原因であると考えられる。

7 今後成すべき問題点の検討

前述した三つの側面から行われた生活書店研究はいずれも基礎的かつ重要なものとなっているものの、その全体像を明らかにしたとは言い難く、少なくとも生活書店の言説産出を支える組織的な部分はいまだに明らかになっていない。また、日中戦争期後期から1949年の中華人民共和国成立までの間において第三勢力と呼ばれてきた生活書店の状況、とりわけ国民党・共産党との関係に関する研究の蓄積も十分とは言えない。⁶さらに、これまでの生活書店に関する研究は、所謂ジャーナリズム研究によく見られるアプローチである言説分析（テキスト分析）が用いられている。しかし、このような手法に偏ることは、言説産出のメカニズム、すなわち組織的、社会的背景を十分検証できない

という弱点があると思われる。生活書店の出版物のような活字メディアにおけるテキストの行間に潜む感情や思想、そして言説を生み出す政治的かつ社会的文脈をより確かなものとして浮かび上がらせる必要がある。

以上のような考えに従って、筆者は以下のいくつかの側面から、既存研究の補完を兼ねて、生活書店及び鄒韜奮に関する体系的研究を深化する／すべきことを提起する。

第一に、生活書店の関係人物について、中心人物とされてきた鄒韜奮だけでなく、彼の周辺にいた人物にも焦点を当てる必要がある。すなわち、鄒韜奮を支え、生活書店の経営に緊密に関わってきた黄炎培、胡愈之、徐伯昕、杜重遠などに注目し、彼らが生活書店の経営、とりわけ鄒韜奮が亡くなった以降、生活書店が三聯書店へ「変身」した1940年代の状況について考察する。この点の検証を通して、生活書店と、国民党・共産党との関係についてももう少し明白にする可能性がある。

第二に、生活書店の経営方式には、「合作社」という性質が見られるが、それが農業や工業の分野における合作制度とどのように異なっていたかという点について考察する必要がある。この点に関しては、生活書店の資金調達の実態を追うことによって、出版機構において「合作社」制度を実施した際の問題点及び利点を明らかにする。さらにその制度がメディア企業として行われた募金活動などのような社会活動とどのような関係にあったのかという点についても考察する余地がある。⁷

第三に、1930年代末期以降、生活書店は中国全土にわたり50以上の支店をもち、膨大なネットワークを作りあげた。複数の地方支店、たとえば漢口、長沙、重慶などの実態を解明することによって、このネットワークの様子を明らかにする必要もある。

総じて言えば、以上のような視座の下で体系的な生活書店研究の構築を目指すべきである。一定の時期に限った断片的な既存研究に対して、長いスパンを通して、生活書店を多角的、総合的に描くことは重要だと考える。また、生活書店は近代中国の政治・経済・国際関係など多くの領域と関わっていることも念頭に置き、それらの諸領域までも見通せる共通性を最大限に見出すことを試みるべきだろう。

研究アプローチについては、生活書店の支店ネットワークに関する考察に、歴史地理学の視点と研究手法を導入することを提案したい。生活書店の支店数増加の時期的、地理的傾向、そして本店と支店との関係などについて、地理学の分析手法を取り入れ、新たに「生活書店支店変化地図」を作成し、日中戦争期における本店と支店の地理的変化の可視化を図る。こうして最終的には、文献による情報の再構築を試み、生活書店の構造を立体的に描き出すことが可能となるであろう。

一方、生活書店の人的ネットワークに関する考察には、社会ネットワーク分析の視点と手法を用いることも可能であろう。社会構造を分析対象とする社会ネットワーク分析(SNA=Social Network Analysis)は多くの学問分野において応用される社会学的のアプ

ローチである。ここでは、とくに史的社會ネットワーク分析（HSNA=Historical Social Network Analysis）を用いることに意義があると考ええる。生活書店の関係者の多くは、当時の政界や財界とは緊密な関係を持っていた。とりわけ彼らは「第三勢力」と呼ばれ、国民党・共産党との間に、距離感を有した複雑なつながりを持っていた。生活書店の関係人物らの社会関係資本（Social Capital）によって構築された生活書店をめぐる人的ネットワークを解明することは、これまでの既存研究に見えてこなかったものを浮かび上がらせる可能性がある。

注

- 1 郝丹立（2002）、302頁。
- 2 Mitter Rana（2004）、83頁。なお、Mitter Ranaの研究視点については、吉澤誠一郎（2012）に参照されたい。
- 3 郝丹立（2002）、8頁。
- 4 『韜奮全集』第1巻、1頁。
- 5 郝丹立（2002）、16頁。
- 6 この点について、拙稿（2012b）において初歩的な考察を行った。
- 7 生活書店の「合作社」的性格について言及した研究としては、菊池一隆（2002）が挙げられる。また、生活書店の募金活動については、拙稿（2012a）で取り扱っている。

文献一覧

<日本語（五十音順）>

- 石島紀之「抗日民族統一戦線と知識人——「満州事変」時期の鄒韜奮と『生活』週刊をめぐる一前編」『歴史評論』256（1971）：22-50
- 石島紀之「抗日民族統一戦線と知識人——「満州事変」時期の鄒韜奮と『生活』週刊をめぐる一後編」『歴史評論』259（1972）：81-92
- 石島紀之「穆欣著／田島淳訳『中国に革命を一先駆的言論人鄒韜奮』（サイマル出版会）」『中国研究月報』468（1987）：36-37
- 今村与志雄「自由の系譜」野原四郎編『新装版 講座中国Ⅲ 革命の展開』（筑摩書房、1972）：155-199
- 「鄒韜奮と魯迅—鄒韜奮ノート—」『文学』47.6（1979）：50-69
- 『魯迅と一九三〇年代』（研文出版、1982）
- 大石智良「一二・九運動」『中国』59（1968）：17-55
- 神戸輝夫「日中戦争における文化侵略（3）—『抗戦』掲載「戦時教育方案」について—」『大分大学教育福祉科学部研究紀要』23.2（2001）：207-222

- 神戸輝夫・田宇新「鄒韜奮の抗日救国論—「満州事変」と「第一次上海事変」を中心に—」『大分大学教育福祉科学部研究紀要』25.1（2003）：31-46
- 菊池一隆『中国工業合作運動史の研究』（汲古書院、2002）
- 小池洋一「鄒韜奮のこと」『大安』6（1960）：16-19
- 斎藤秋男「《救国時報》と陶行知・鄒韜奮：“救亡＝救国”運動研究のために（2）」『中国研究月報』401（1981）：1-8
- 高橋俊「修養する青年たち—『生活週刊』と新しい労働観の生成」『野草』83（2009）：63-83
- 穆欣『中国に革命を—先駆的言論人鄒韜奮』田島淳訳（サイマル出版会、1986）
- 横山英「抗日運動と愛国的ジャーナリスト—鄒韜奮の活動と思想変革」『広島大学文学部紀要』26.3（1967）：171-189
- 吉澤誠一郎「五四運動から読み解く現代中国—ラナ・ミッター『五四運動の残響』を手がかりに—」『思想』1061（2012）：147-159
- 楊韜『ジャーナリスト鄒韜奮の発展：公共圏をめぐる彼の思想と活動』（名古屋大学大学院国際言語文化研究科修士論文、2007a）
- 「ジャーナリスト鄒韜奮とジョン・デューイ思想—近代中国知識人の一つのあり方」『メディアと文化』3（2007b）：73-87
- 「「新生事件」をめぐる日中両国の報道とその背景に関する分析—差異と原因」『メディアと文化』4（2008a）：161-176
- 「1930年代における中国知識人の西洋理解—ジャーナリスト鄒韜奮の欧米体験を中心に」『多元文化』8（2008b）：321-331
- 「近代中国における「国貨」をめぐる言説の一考察—雑誌『生活』（1925～1933）を通して」『現代中国研究』24（2009a）62-75
- 「投書欄における読者・投稿者・編集者—生活書店出版物を対象とした歴史的考察」『中国研究月報』63.9（2009b）：13-25
- 『上海におけるメディアと近代性（1926～1939）：共同体、日常生活、ナショナリズム』（名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士論文、2011a）
- 「近代中国におけるセクシュアリティ言説—雑誌『生活』の投書欄における論争を中心に」『言語文化論集』33.1（2011b）：167-180
- 「生活書店の募金活動について」『言語文化論集』33.2（2012 a）：141-155
- 「戦時中国における鄒韜奮の政治活動」『言語文化論集』34.1（2012 b）：153-166

<中国語（ピンインローマ字順）>

- 陳揮『鄒韜奮：大衆文化先駆』（上海教育出版社、1999）
- 陳揮『鄒韜奮評伝』（上海交通大学出版社、2009）
- 郝丹立『韜奮新論：鄒韜奮思想發展歷程研究』（当代中国出版社、2002）
- 穆欣『鄒韜奮』（中国青年出版社、1958）
- 『新版 鄒韜奮』（湖北人民出版社、1981）
- 韜奮紀念館編『鄒韜奮研究 第一輯』（学林出版社、2004）
- 韜奮紀念館編『鄒韜奮研究 第二輯』（学林出版社、2005）
- 韜奮紀念館編『鄒韜奮研究 第三輯』（学林出版社、2008）

- 俞潤生『鄒韜奮傳』(天津教育出版社、1994)
鄒韜奮『患難余生記』(北京三聯書店、1958)
——『事業管理與職業修養』(香港三聯書店、1978)
——『韜奮全集』(上海人民出版社、1995)
——『經歷』(岳麓書社、1999)
鄒嘉驪編『韜奮著述系年目錄』(學林出版社、1984)
鄒嘉驪編『憶韜奮』(學林出版社、1985)
鄒嘉驪『韜奮年譜(上、中、下)』(上海文芸出版社、2005)

<英語>

- Coble, Parks M. "Chiang Kai-shek and the Anti-Japanese Movement in Cina: Zou Tao-fen and the National Salvation Association, 1931-1937." *The Journal of Asian Studies*. XLIV, No.2 (1985): 293-310
---. *Facing Japan: Chinese Politics and Japanese Imperialism, 1931-1937*. Cambridge: Harvard University Press, 1991.
Gewurtz, Speisman M. *Between America and Russia: Chinese Student Radicalism and the Travel Books of Tsou T'ao-fen 1933-1937*. Toronto: University of Toronto-York University Joint Centre on Modern East Asia, 1975.
Mitter, Rana. *The Manchurian Myth: Nationalism, Resistance, and Collaboration in Modern China*. Berkeley: University of California Press, 2000.
---. *A Bitter Revolution: China's Struggle with the Modern World*. New York: Oxford University Press, 2004.
Yeh, Wen-Hsin. "Progressive Journalism and Shanghai's Petty Urbanites: Zou Taofen and the Shenghuo Enterprise, 1926-1945." *Shanghai Sojourners*. Ed. Jr. Wakeman, and Wen-hsin Yeh, Berkeley: Institute of East Asian Studies University of California, 1992. 186-238.
----. *Shanghai Splendor: Economic Sentiments and the Making of Modern China, 1843-1949*. Berkeley: University of California Press, 2007.

<韓国語>

- 田寅甲「上海人の "모던" 과 生活 文化 : 『生活週刊』 의 분석 (1) = 上海人的摩登與生活文化」『中国近現代史研究』 17 (2003) : 69 - 105